

ウォッチガーデンの活動から 若葉台保育園(福島県いわき市)

【5歳児】

事例1 「えー、本当にチョウチョになるの？」 5歳児

5月22日(月)

菜の花も念入りに観察し「うわー、アオムシがいるよ」と、一人が発見すると、葉っぱの裏に着いた卵も見つけ、「この卵がこうなるんだよ。そして、チョウになる！」、「えー、本当にチョウチョになるの？」という、会話から、菜の花ごと保育園に持ち帰ることになった。

「うわー、アオムシがいるよ！」とA児がいうと、みんなが集まってきた。「ちょっとくてかわいいね」「なんのアオムシだろうね？」アオムシを囲んで会話が弾む。

よく見ると、数匹のアオムシが見つかった。「こっちの葉っぱには1匹もいないよ」とトマトや枝豆の葉っぱにはいないことに気付いたB児。穴のあいた葉っぱを見て、「アオムシがいっぱい食べたんだね」とC児。

そして、「せんせい！これなに！？」と特別大きな声で、D児が叫んだ。見ると、葉っぱの裏に卵がついていた。「何かの卵みたいだね」と保育士が応えると、「この卵がこうなるんだよ」とE児は卵を指さし、次にアオムシを指さし、「そしてチョウチョになる！」と、生き物の成長の経過を予想しているようだ。F児が、「えー、本当にチョウチョになるの？」と目を大きくして言う。見ていないものは、実感として感じられないのだろう。

「じゃあ、見てみようよ！チョウチョになるかどうか確かめてみよう！」と保育者が提案し、「どうすればチョウチョになるところが見られるかな？」



と問いかけてみる。「アオムシを保育園に持って帰るよ」「虫かごでは、狭くてかわいそうだよ」「エサは菜の花の葉っぱだよね」など、どんどん子どもたちで話が進む。そして、最終的には、卵のついた菜の花とアオムシがついている菜の花を根っこごと持ち帰ることになった。それから、チョウチョになるまでの観察活動が始まった。

アオムシとの出会いを大切に、関わりを持たせたい。

自分たちで、意欲的に、比較・観察・推察等ができています。

一人の言葉を取り上げ、観察活動へつなげて欲しい！

うわー、動いた

観察方法を自分たちで決めることで、主体的な活動を今後、展開して欲しい！

事例2 「うわー、アオムシの形、ぜんぜん違うよ！」 5歳児

5月31日(水)

畑から根っこごと持ち帰った菜の花についてアオムシが、さなぎになった！さなぎになった第1発見者は、アオムシが動かなくなったことに気付き、関心を持って観察していたA児だった。

菜の花についてアオムシの観察を続けていた5歳児。「アオムシ、さっきから動かないよ」と気付いたA児。しばらく遊んでは、どうなったかな？と何度も見に来る。その様子を保育士は見守った。そして、ついに「うわー、アオムシの形、全然違うよ！」と大声をあげた。保育士も、周りにいた子も集まってくる。見ると、背中が少し持ち上がり、さなぎになりかけていた。よく見ていないと分からないぐらいの変化だった。

子どもたちは「ほんとだ、ほんとだ」「ずっと、動かなかったもんね」と、時間の経過を追っての比較をし、じっと見入っている。さなぎを見るのは初めてだろう子どもたち。初めての体験は、いつも感動が伴うようだ。

「動かないって、死んじゃったってこと？」と保育士が聞いてみると、B児は、まだ動いている虫とさなぎになりかけている虫を指さしながら、「違うよ！これが、こうなるんだよ」「そうそう、この次は、皮を脱ぐんだよ」とC児。

アオムシの観察を始めてから、子どもたちは、図鑑で調べたりしながら、その成長過程を理解していった。保育士が「じゃ、次は？」と聞いてみると、一呼吸置いて声を揃え、「チョウチョ！」と嬉しそうに答える。「なんて、かわいいんだろうね」とD児がしみじみと言う言葉には、実感がこめられているのを感じた。

さなぎになる瞬間を子どもたちに見せたい。



少しの違いも、よく観察していたからこそ、発見でき、「全然違う」と表現したのだろう。

自主的に調べる姿から、その興味・関心が深まっていることが分かる。

事例3 「チョウチョはカマキリのえさ!?」 5歳児

7月 4日(火)

さなぎがどんなチョウになるのが楽しみにしていた子どもたち。朝登園すると、2匹同時にモンシロチョウになっていた。数日後には、黒アゲハも成虫になっていた。このまま観察を続けるか、広い空に飛ばしてあげるか、それともカマキリのえさにする?

「やっぱり、モンシロチョウだった!」「ちょっとだけ黒い模様が違うね。」「エサはやっぱりお花の蜜だよね」「ストローがまるまってるよ」など、大興奮。その後2日間、観察をした後、「虫かごの中では、狭くてかわいそうだね」と、言ったA児の言葉をきっかけに、(子どもたちの話し合いで逃がすことにした。逃がすと、みんなで追いかけて始める。園庭のイチゴの葉にとまると、モンシロチョウを囲みじーっと見つめる男児数名。「うわー、ストローが伸びたよ!!!」「さっきは、丸まったのに!」と大興奮だった。

視点を与えなくても、自主的に細かなところまで、じっくり観察する力がついてきている。

事例4 「アオムシがあげはちょうになった!」 5歳児 7月1

シマシマ模様の幼虫のさなぎが、黒アゲハになっていた。「アゲハちょうだ!」「やっぱ、ストローがあるよ」と、意欲的に観察をしていた。モンシロチョウを逃がす経験をした子どもたちから、逃がそうという意見が出ると思っていたら、B児が「逃がすの嫌だ!」と言う。「カマキリのエサにしたい!」と強く主張する。5歳児の部屋で、卵から持ち帰ったカマキリが育ち、大きくなってきているのだ。女兒たちは「エサにするのはかわいそうだよ。生まれたばかりなのに」と、反対する。「だって、エサがないとカマキリだって死んじゃうよ。」とB児。十分に子どもたちの意見を出させ、「一度も空を飛べないのはかわいそう」と、言ったC児の言葉を最後に、逃がすことに決めた。

空高く舞い上がる黒アゲハに「クモの巣にひっつかないでねー!」「また来てねー!」と見えなくなるまで、手をふる子どもたちだった。



自然界の仕組みを理解し、自分の意見を友だちに伝えられている。

食う食われる関係を理解し、どちらも大切だと思う子どもの心はすばらしい!

子どもたちの、それぞれの思いを尊重しながら、クラスとしての答えを、子どもたち自身で出して欲しい。

~ 実践の考察 ~

ウォッチガーデンで出会ったモンシロチョウの幼虫を育てることで、さまざまな気づきがあり、意欲的に調べたり、比べたり、試してみたりする姿が多く見られ、生き物への関心が深まった。また、愛着を持つことができた。

「チョウチョをカマキリのエサにしたい」と、どちらも大切に育て、どちらの命も大切だと思うからこそこの発言は、保育者である私たちも心を揺さぶられた。それぞれの思いがありながらも、クラスとしてひとつの答えをだすことができた経験は、子どもたちの心を豊かにする良い体験となったと思う。

ウォッチガーデンを中心とした園周辺の自然は生き物や植物との出会いに溢れている。そんな出会いを無駄にすることなく、子どもたちの心の動きに寄り添い、子どもの好奇心、自ら探究する心を大事にしていきたいと思う。

みどころ

子どもたちが自然とのかかわりや探求心を満足できる豊かな体験ができるような環境を大切に、保育者が「ウォッチガーデン」と命名して意識して保育をしたと思われます。日常的に興味をもって子どもたちがかかわれるような環境の工夫があり、保育者自身も願いをもって保育をすることで、子どもたちの心も動き、好奇心が発揮されます。そうした子どもの心に寄り添う保育者がいることで、さらに探求したり発見したりすることを楽しむ姿が引き出されています。